

1 静岡県が中学校外国語科(英語)で目指すもの

(1) 育てたい子どもの姿

静岡県は、小学校で育てた子どもの姿に加え、子どもたちが英語の学習を通して、次のア～ウのように育つことを目指します。

ア コミュニケーションの広がりや深まりを「魅力的」だと感じる子ども

中学校の英語の学習では、子どもが相手と様々なコミュニケーション活動を繰り返し行うことで、お互いをよりよく理解し、関係が深まっていくことが期待されます。教科書を通して間接的に、また直接の交流活動等を通して、コミュニケーションの対象が学級の外の世界にも広がっていくことになり、世界中の人や様々な出来事と関わり合いたいという意欲が高まるでしょう。子どもは、言葉を通してお互いの思いを理解し合えたり、教科書に出てくる主人公と共感できたりすることで、コミュニケーションの可能性に気づき、英語を学習し、多様な「人・もの・こと」とコミュニケーションを図ろうとするのです。

さらに自分とは異なる文化や生き方、考え方をしている人とのコミュニケーションを通して、子どもは、多様なものの見方や考え方に対して寛容になったり、互いの価値観を尊重したりする態度を身に付けるでしょう。これは、自国の文化や外国の文化を大切に思う機会となり、国際協調の精神の育成につながります。

「人・もの・こと」と豊かに関わるコミュニケーション活動を通して、寛容性や協調性を育み、コミュニケーションの広がりや深まりを「魅力的」だと感じる子どもを育てましょう。

イ 英語の基礎的な運用能力を発揮する子ども

中学校において、教科として英語を学習することにより、子どもは基礎的な英語の運用能力を身に付け、小学校の時には言いたくても言えなかったことを表現できたり、知りたいのに分からなかったことが理解できたりするようになります。

コミュニケーションが広がり、深まるにつれ、自分の思いを分かりやすく伝えたり、相手の言いたいことを正しく受け止めたりするには、文字や語彙、様々な表現の知識が必要であることに気付くでしょう。

豊かなコミュニケーションを展開するためにも、学んだ語彙や表現を「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」のそれぞれにおいて活用し、4技能をバランスよく身に付け、場面に合わせて効果的に運用する力が必要です。

身に付けた英語の基礎的な運用能力を十分に発揮し、自分の思いを適切に伝え合うことができる子どもを育てましょう。

ウ 自ら学んでいくことができる子ども

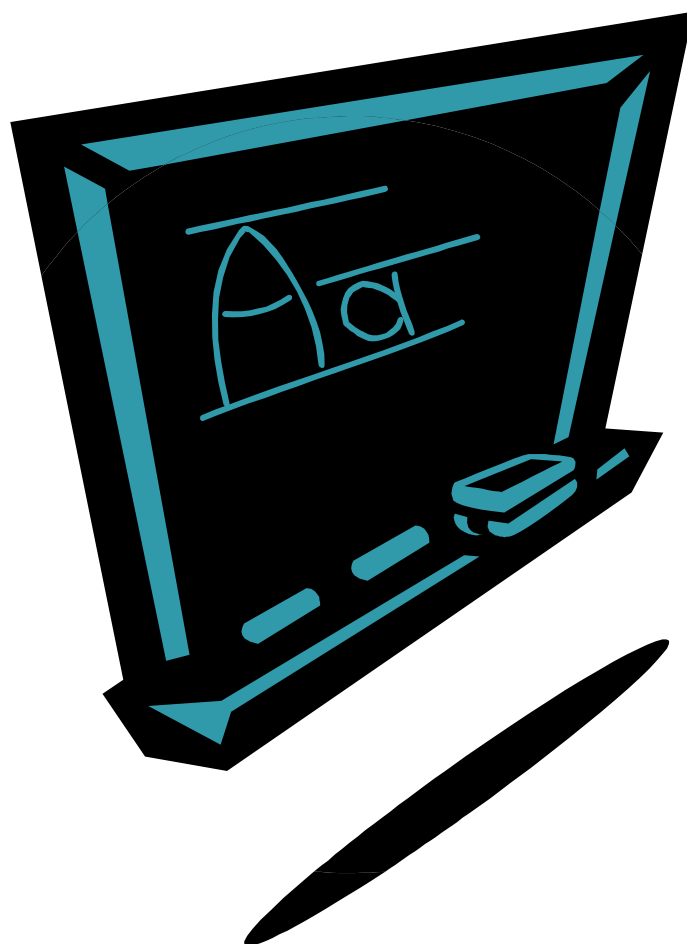
子どもは、英語の学習を通して「人・もの・こと」と関わることにより、多様なものの見方や考え方に触れ、「学ぶ」ことの魅力と必要性を理解します。

関わりの深まりが自分の成長につながることを実感した子どもは、分からないことや知りたいと思ったことをそのままにしないで、質問したり確認したりするでしょう。

また、英語によるコミュニケーションを通して得た成功体験は、子どもに自信を与え、答えや情報を求めて行動を起こしたり、自分の考えを発信したりすることのできる、主体的な学習者としての素地を育てる上で大いに役立ちます。

その結果、子どもは、他教科も含めて自発的に学習するようになり、その中で試行錯誤を繰り返しながら自分にあった学習方法を確立していくでしょう。

グローバル化の進展に伴う急速な社会の変化に対応して生きていくことができるよう、必要な知識や技能を自ら学ぼうとする姿勢を持ち、「学び方」を身に付けた子どもを育てましょう。



(2) 目指す授業

静岡県は子どもが前述のように育っていくために、外国語を用いて次のア～ウのような授業を目指します。

ア コミュニケーションの楽しさを実感する授業

子どもがコミュニケーションの楽しさを実感できるよう、「伝えたい」「知りたい」という思いや意欲が高まる課題を設定しましょう。

そのためには、子どもの生活と結びつく場面や未知の世界と出会う場面において、相手と積極的に関わりながら、お互いの関係を深めていける活動に取り組ませる必要があります。

友だちについて新たな発見をしたり、自分らしさを十分に表現したりすることを通して、子どものコミュニケーションに対する期待感は、一層膨らんでいきます。同時に、言葉は、場面や状況があってこそ意味を伝えることが可能であることを体験的に理解するでしょう。

ここで言うコミュニケーションとは、直接的な交流に限られたものではありません。例えば、教科書を読む際に、子どもが主人公の生き方に心を揺さぶられ、自分と向き合い、自分の生き方を深く考えるとすれば、これも充実したコミュニケーションの一場面だと言えます。

子どもが言葉の機能や効果を実感し、人と主体的に関わる意欲を高めていけるように、場面や状況、対象、手だて、目的等を子どもの実態に合わせて適切に設定し、コミュニケーションの楽しさを味わうことのできる授業を目指しましょう。

イ 4技能の総合的な育成につながる授業

子どもの言語運用能力を高めるために、本時を通して付けたい力を明確にしましょう。その際には、学習内容や單元ごとのつながりを考慮し、4技能に軽重を付けて扱ったり、定着させたい言語材料を繰り返し扱ったりすることが大切です。

コミュニケーションの本質は「価値のある情報のやり取り」であり、「聞く」「読む」という「受けとめる活動」と、「話す」「書く」という「伝える活動」との有機的な組み合わせに、内容が伴って初めて、コミュニケーション活動と言えます。既習表現も使って、複数の技能を組み合わせ活用させる場面を設定し、まとまりのある深い内容のやり取りを行う中で、子どもの言語運用能力を伸ばしましょう。

4技能を総合的に育成するために、授業の中で子どもが触れる英語の量を十分に確保し、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した具体的な言語活動を通して、子どもがコミュニケーションへの自信を深めることができる授業を目指しましょう。

ウ 自律した学習者が育つ授業

「自律した学習者が育つ授業」であるためには、子どもが授業中に「主体的な学習」を経験し、その成果を「成功体験」として蓄積していく必要があります。その場面として、英語の授業は最適であると言えます。なぜなら、その中心が、言葉を通じて人とつながる喜びを体験するコミュニケーション活動であり、「成功体験」を味わう多くの機会を、子どもに提供できるからです。

コミュニケーションを成立させるためには、自分の能力を駆使し、様々な工夫を凝らす必要がありますが、このとき子どもは、まさに「主体的な学習」に取り組んでいます。また、努力の結果が、伝わった喜びに結び付くならば、それは「成功体験」そのものと言えます。英語の授業を通じて学びの成果を実感した子どもは、意欲的に次の学習へと向かっていくでしょう。

この「学びの実感」を家庭学習に結び付けるために、授業で学んだことが家庭学習に活き、家庭学習で学んだことが授業に還るといふ、スパイラルを確立することも大切です。自らの成長を確認し、自信をさらに深める機会を得ることで、子どもは学習の成果を一層実感するのです。

英語の授業を通じて、自律した学習者を育てましょう。

